猩々

早詞

是ハもろこしう國さきさんの
かもろが揚子乃里にかうかうと
中民かそへが郡歌に并をとふよりや
が徳かしむ乃氣を見るる揚子の
帝にいて酒錢なくハ買出の
男と來逢しとがしへのまくる
上カル一ヽ二ニ二ト一ヽヿ
なれつきの時去時来てる居り

詞

次第〱に富貴の身と成て候
爰に不思議なる事の候
市毎に来て酒をのむ者の候
かきりなき酒をのみなれ共
面色はさらにかはらす候程に
餘に不審に存名を尋て候へは
海中に住猩々とも申候なり

潯陽の江に出て酒をたゝへ候
また夜ならん必来るへき由申は
ほとよくくれぬ夜やその江に

上歌

出て酒をひらきめけや此友は
潯陽の江乃ほとりにて
菊をたゝへて夜もすがら月の
まへにも友待やまたかたふくる

まちふよ菫の葉乃露をかぞへ
波の数とりかへしえ
やよ浦風乃 塩のへや
かゝる舟 あわれさや浪方
んにほ影かな 風ふかば浪か小
よ浪ミ浅 たへ見しの庵し
下
あさ小舟あわぞも浪きまく

千代まで経ず松の葉乃色ぞめ花
緑の色のめともかはらぬ秋乃
契乃さへ浅きのはも深く
入江入り神の浪あしとを
よふく見ゆらんか汲よる花の
夏乃ぎ女房と思へ夫より見え
思ひ絶えぬ前ちとめて身なる